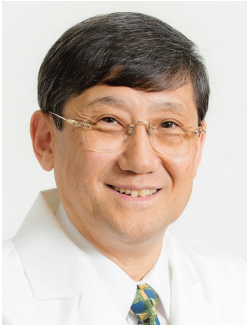


「私と国際頭痛学会」



医療法人社団健育会 湘南慶育病院 院長/
慶應義塾大学名誉教授
鈴木則宏

私が初めて国際頭痛学会に参加したのは、北里大学に在籍中の2001年9月11日ニューヨークで発生したアメリカ同時多発テロ事件の2ヶ月前に同地で開催された頭痛学会でした。開催時には健在であったワールドトレードセンターがまだ目に焼き付いています。2004年に慶應義塾大学に異動しましたが、以後2年ごとに開催される国際頭痛学会には毎回演題を出して出席しています。一番思い出に残っているのは2005年に日本頭痛学会代表理事であった坂井文彦先生が会長で京都において開催されたIHC2005京都です。京都頭痛宣言が発表され、わが国の頭痛医療を世界に発信することができた画期的な学会でした。

その後、Michael Moskowitz先生と Peter J Goadsby先生から推薦をいただき2011年から2013年まで、International Headache Society Board of Trusteesの一員として国際頭痛学会の運営に参画しました。在任期間のPresidentはPeter J Goadsby先生（米国、英国）で、Alan Rapoport (President-elect、米国)、Stefan Evers (Secretary、ドイツ)、Wendy Thomas (Treasurer、英国)、Messoud Ashina（デンマーク）、Carlos Bordini（ブラジル）、Andrew Charles（米国）、Tobias Kurth（ドイツ）、Allan Purdy（カナダ）、Guus Schoonman（オランダ）、Norihiro Suzuki（日本）、Cristina Tassorelli（イタリア）、Adam Speller (Financial Advisor、英国)、Carol Taylor (Administrative Manager、英国)がBoard Memberでした。Boardでは、総会時のみでなく定期的な会議が開催されましたが、コロナ後の現在のようなWeb会議システムは存在せず、国際電話で各メンバーをつないでTeleconferenceで会議が行われました。相手の顔を見ないでの会議は、発言後の全員の反応やニュアンスが計り知れず、苦勞したことを思い出します。Board在任中の思い出に残る大きなイベントは、国際頭痛学会と日本頭痛学会との共催事業である「Headache Master School in Japan」を2013年3月に2日間にわたり国際頭痛学会の多くの重鎮を講師に迎え東京ステーションコンファレンスにて開催されたことです。当時のBoardのメンバーとは現在でも交流があり、最近では2024年12月に第52回日本頭痛学会総会に招待され来日したAlan Rapoport先生と旧交を温めることができました。

国際頭痛学会で演題を発表して、「頭痛」という共通の興味を持つ世界の臨床家、研究者と交流することは、自らの能力を高めるだけでなく視野を広げることができる貴重な機会であると思います。